

本興寺だより

令和六年

九月

第二六一号

「風に随って波の大小あり。薪によつて火の高下あり。根深ければ枝しげし。源遠ければ流れながし」

(宗祖 報恩抄)

周囲の田では、稲刈りが始まります。夏の暑さも弱まり、秋の気配が感じられるようになってきました。春植えた苗が、何時しか沢山の稲の穂をつけ、たわわに実っています。草木を問わず、生命あるものの躍動して生きている姿を実感させられます。

命の持つ神秘さと生きる力が見て取れます。人の命も同様で、森羅万象の命と同様に、その生きる力と姿勢を見習うことが大事かと思えます。

大木は、水をやらなくても、日照りが続いても枯れません。雑草も同様です。しかし花壇や植木鉢の花は水やりを怠るとすぐ萎れ、枯れますか？

この違いはどこからくるのでしょうか？一つは、根の大きさです。大木になるほど根は大きく、深く、広く大地に無数に張りつめます。背丈が伸び、葉が繁り花や実がなる頃には、根は種や苗の時よりはるかに長く大きくなっています。

一つは根が大地と繋がる広さだと思えます。植木鉢や花壇の花などは、ごく限られた囲いの土の中でしか根を伸ばすことが出来ません。ここが乾くとほどなく



しぼみます。自然の中にある草木や花は、その根が大地を共有しています。その中から広くエネルギーをもらうから強いのです。人の生き方を草木に照らしてみると、人の身体成長は、草木の地面から上の生育に当たり、人の心は目に見えない故に、地中に張る根のごときものです。根が枯れたり、切られたりすれば、地上に出ている草木も、人の肉体（身体）も衰退してきます。

人も己の心の持ちようが根のように、身体にも運命にも大きな影響を及ぼすのだと云われています。

日々の生活には、良いことばかりではありません。いろいろな出来事で心が良い方にも悪い方にも傾くことがよくあります。

いつも良い心でいられば一番良いとは思いますが、なかなかそうはいきません。

しかし悪い心や行為は小さいことでも絶対に慎むべきなのだと思われまます。

「悪」という字は、「亞」と「心」の合体です。「亞」とは古代のお墓を上から見た形でもあります。

先祖の墓を造って祭り、引き継いでいく大切な気持ちを忘れ、道徳に反するおぞましい心持ちになる状態が「悪」の始まりなのです。自分の命の源を忘れ、感謝を忘れた生き方が、悪の心を芽生えさせやすいのです。

悪い心に鈍感に生きることが、知らず知らずのうちに己の命を縮め、死（墓）（亜）を早めることになることを悪の字は示しています。

外から見えない根はまた、ご神仏のご加護でもあり、先祖からの支えでもあります。

神仏の加護、先祖の想い、関わる人々の支え、そして自分の心（考え方、生き方）が根となって、それぞれの人の人生（地上の草木に当る部分）が形作られると云われます。

中島みゆきの名曲に「糸」があります。本人が知人の結婚式を祝うために作詞作曲された曲ですが、その中に「縦の糸はあなた 横の糸は私・・・」とあり、最後の歌詞に「合うべき糸に出逢えることをし合わせと呼びます」とあります。「幸せ」と言わず、あえて「し合わせ」と書いています。

「し合わせ」には、運命的な意味もあります。本来この言葉には、良いことも悪いことも含めた巡り合わせの意味がありますが、幾多の困難があつても、それを乗り越えて、し合わせ↓幸せにいたることを祝う気持ちなのではないでしょうか。

人生は、関わる人々の力が、網の目のようになって、縦横に織りなす支えの暖かい敷物の上に安らげていることに気付けないのかもしれない。

日蓮聖人の冒頭の文のように、根が深ければ枝葉が繁り、安定と豊かな実りがあるのです。川の源が遠ければ長い流れとなります。世界一のナイル川は、水源から河口まで約六千七百kmと言われています。源が長いと多くの国、人々、大自然を潤す力となります。

人の生き方も、自身の命の源を知り、ご神仏へ感謝と遠き過去からの先祖へのご供養の気持ちをお忘れな



いで生きることが大事であると示されています。心の根を切ったり、根腐れをおこせば自分が枯れてしまいます。植木鉢の草木はそれなりの小さな花しか咲かせません。大地に根付けば大きな広がりの中で生き生きとしています。

まもなく秋のお彼岸を迎えます。彼岸の中日（秋分の日）は昼と夜の長さが等しくなります。

天の運行を通して神仏が教えているのは、人の心もそれに準じて何事も切り替えていくことなのです。

人が生きることが車を運転するようなものです。車体は身体、四つの車輪は、喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、の気持ちで回転し続けている私達の心です。

車輪は前進はもとより必ずバックも必要です。人生には時には、自分を押し通すばかりでなく、引き下がることも必要です。

喜怒哀楽の気持ちの車輪も、共に同じ目線と心で見つめ対処できる冷静な心のバランスが大事なのです。

昼の光と夜の闇が等しい彼岸のように、嬉しい時も辛い時も、等しく偏らず見つめられる心が、例え困難にあつても、感情的に偏らず、それを乗り切る智慧が授かるのだと説かれています。

お彼岸の時期の日の出も日没の夕焼けも大変美しいものがあります。誕生（日の出）した人生を全うして、何時かは臨終（日没）も美しく去っていきける一生でありたいものです。